エッセイ

太い時間・細い時間

浦野裕司

最近、「タイパ」（タイムパフォーマンス）という言葉をよく見聞きする。若者にとってタイパが高いものの代表は、動画コンテンツの倍速視聴らしい。情報関係の動画ならまだしも、ドラマや映画の倍速視聴もしている若者が多いと聞くと、少なからぬ危うさを感じてしまう。そんなことをしていたら、時間はどんどん痩せていき、細くなってしまうのではないだろうか。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

昔の「時間」は今よりのんびりと太っていて、それを「時間の節約」の名のもとに、ずいぶん細らせてしまったのが、今の「時間」のように思える。さまざまな利器が文字どおり時間を削り、いちおう何かを短縮したことになっているものの、あらためて考えてみると、削られたものは、のんびりとした「時間」そのものに違いない。

（吉田篤弘著「それからはスープのことばかり考えて暮らした」中公文庫・Ｐ５０～５１）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

小説の主人公の考えではあるものの、いろいろと考えさせられる言葉だ。過去を振り返ってみると、実際に時間には太い細いがあるような気がする。

給食の早食い習慣

細い時間とは、どんな時間なのだろう。真っ先に思いついたのが給食の時間だ。とにかく早く食べることを優先してきた。味わうどころではない慌ただしい食事の時間は、間違いなく細い。

小学校に勤務すること四十余年。私自身が小・中学生だった九年間も含めれば、五十年以上も給食を食べてきた。子どもの頃は、お代わり欲しさに猛スピードで給食を平らげた。教員になってからは、食べる子どもたちの様子の観察、連絡帳記入、提出のチェックなど、さまざまな仕事を並行しながら、飲み込むようにして食べてきた給食である。そんな給食の時間を大雑把に数えると、一万回近くも繰り返してきたことになる。今も早食いの習慣が改まらないのは、当然の結果なのかもしれない。「味わう」ということを犠牲にした給食の時間は短いというだけでなく、なんとも細い時間なのだ。

立ち食い蕎麦屋の時間

細い時間といえば、給食以外にも立ち食い蕎麦のことを思い出す。ファストフードの中で、私が最も多く食してきたのが立ち食い蕎麦。電車の発車時刻に間に合うように時計とにらめっこしながら蕎麦をすする時間の細さは、給食の比ではないだろう。

ところが、である。お茶の水・神田界隈の写真を撮りに行った折のこと。立ち食い蕎麦だからといって、そこで蕎麦を食べる人々にとっては、必ずしも細い時間というわけではないと気付かされた。

御茶ノ水駅からニコライ堂を横目に、神田方面に向かう。美しい秋空に向かってそびえ立つ高層ビルの狭間を進み、神田の老舗「藪蕎麦」を過ぎた先で、「六文そば」という看板が目に入った。時代に取り残されたような小さな立食い蕎麦の店だった。折しも昼食時。近くのビルから出てきたサラリーマンや、配達の途中で車を止めて店に入っていくドライバーなどが、次々に暖簾をくぐる。

かきあげ蕎麦、春菊天そば、紅しょうが天そ

ば、そして名物のいかゲソ天そば。どの客も「今日は何を食べようか」と外壁にある品書きをちらりと見て、慌ただしく暖簾をくぐる。一方、店から出てくる客は皆、入る時の慌ただしさは消え、ゆったりと満足そうな表情を見せるのだ。どうやら、彼らの立食い蕎麦の時間は短くとも細くはないようである。そんな様子を見ていて思い出したのが、受験勉強の合間に食べた立ち食い蕎麦のことである。

経済的な理由もあって予備校に通わなかった私は、夏休みも冬休みも、長期休業になると市立図書館の学習室で受験勉強をしていた。昼時になると自転車で府中駅に向かい、駅前の立食い蕎麦屋で蕎麦をすすった。いつもはかけ蕎麦。無料サービスのネギを、麺が見えなくなるくらいたっぷりと乗せる。食事をする時間も惜しく、飲み込むように蕎麦を食べて図書館に戻った。それでも小遣いに少し余裕があるときは、薄べったいコロッケの載ったコロッケ蕎麦を注文した。かけ蕎麦の時間は限りなく短く細かったが、コロッケ蕎麦を味わう時間は心なしか太かったような気がする。

太い時間を生きる家族

十月のある日、軽井沢に隣接する町に住むN夫妻の家に泊めていただいた。重厚な木造建築の家。庭先の南斜面には、広々とした野菜畑や林が広がり、遥か彼方には八ヶ岳連峰が連なる。N夫妻がこの地に移住して、十年ほどになる。隣家には、一年前に東京から移住してきたお嬢さんの四人家族も暮らしている。雄大な風景と静けさの中に、子どもたちの天真爛漫で明るい声が響いていた。

自然の懐に抱かれ、心づくしの手料理をいただき、広がりも深さもある楽しいおしゃべりに興じていると、実に豊かな時の流れを感じることができた。これこそが「太い時間」なのだと実感できるひとときだった。

Nさんの家族は、それぞれが最もやりたいことを大切にしていた。仕事に、旅に、芸術に、読書に、地域活動に。話を聞けば聞くほど、人としての懐の広さや深さが伝わってくる。そんな人たちばかりだ。太い時間と広い空間に身を置き、豊かな人生を歩んでいるNさん一家。今回の訪問は、これまで生きてきた

時間を振り返り、時間の太さについて考えるよい機会となった。

昔は時間が太かった

コロナ禍を経て、五年ぶりに小学校のクラス会があった。会場は府中市のイタリアンレストラン。開始時刻より早く着いたので、会場近くの大國魂神社にお参りした。境内は、子どもの頃よく遊んだ馴染み深い場所である。鳥居も狛犬もそのままに、変わらぬ情景である。少し早めの七五三参りに訪れる家族が、お祓いを受ける順番を待っていた。

鳥居近くに欅の大木があった。その下に立ってみると、幼少期に神社を訪れた時のあれこれが、現実感をもって思い出された。五歳か六歳の頃だろうか。まさにこの大欅の下で、バナナのたたき売りの流れるような口上を聞いていた。パンパンパンと、バナナを載せた台を叩く音。バナナの房の上にさらにひと房載せ、「さあ、どうだ。もってけドロボー」という的屋（テキヤ）の大声と人々の笑い声。今も、目に耳にありありと蘇る。

同じ場所で、ロータリエンジン搭載のマツダ・コスモスポーツを見たのは、小学三年生ぐらいだったと思う。大欅に見守られながら、興奮してエンジンルームを覗いていた時間は、間違いなく太かった。